斎藤道三の生涯を本に

各務原市の横山さん

各務原市鵜沼山崎町、公務員横山住雄さん(四九)が、戦国時代の英雄・斎藤道三の生涯についてまとめた「斎藤道三」(濃尾歴史研究所刊)を自費出版した。全国各地の史料などを基に二十年がかりで調べ上げた労作。通説となっている道三の稲葉山築城の年・天文八年(一五三九年)を天文四年とするなど、随所に新説が打ち出されており、興味深い内容になっている。

20年がかり、新説唱える

横山さんは幼いころから郷土の歴史に興味を持ち、二十歳ごろから本格的に郷土史などを調べ始めた。現在、県史料調査員で、これまでに「新編犬山城史」「織田信長の系譜」など何冊も自費出版している。

郷土の英雄の斎藤道三については、二十年前から史料を集め、十年ほど前に「後斎藤四代記」を書き上げたが、「物足りない内容」で、さらに検討を重ねてきた。

「斎藤道三」では、通説で天文八年とされている稲葉山築城を、六角、朝倉などの近隣諸国の軍勢に対抗するために天文四年に築城した―と断定。このほかにも、伝来している「道三の遺書」には、織田信長のことを「織田上総介」などと書かれているが、他の手紙では「三郎殿様」と表現してあり、中世の書式では名字を省くのが正しい―と指摘。文章の書き方、筆跡から、遺書は江戸時代に書かれた、との新説を唱えている。

A四判、二百二十七ページ。横山さんは「二十年の集大成として書き上げた。この本が、郷土の英雄・道三の正しい認識につながれば」と話している。

20年間の集大成としてまとめた「斎藤道三」を手にする横山住雄さん＝各務原市役所

1994年(平成6年)11月30日　岐阜新聞掲載

濃飛歴史人物伝 ⑧

城下町の整備に尽くす

斎藤道三 ㊦

一五三三(天文二)年、家督を継いだ長井新九郎規秀(後の斎藤道三)は、稲葉山城を居城とした。父長井新左衛門尉の城を受け継いだもので、新左衛門尉は、一五二五(大永五)年に守護の土岐氏や守護代の斎藤氏を追いやる大乱を起こして以後、斎藤氏の居城であった稲葉山城を手に入れたのではないかと考えられている。

稲葉山城を本拠とした道三は、権力の増大を図るとともに、城や城下町の整備にも意を注いだ。丸山(金華山西北隅)に鎮座していた伊奈波神社を現在の地に移し、そこへ出城を築いて、堅固な山城に改築した。そしてその山麓(ろく)には土塁や惣堀をめぐらせた惣構の城下町を建設した。

この城下町の特徴は、惣構のほかに、稲葉山ろく(岐阜公園周辺)から西へ延びる二本の大道である。一本は現在の金華山登山道百曲り口から西へ、もう一本は七曲り口から西へと向かう筋である。

百曲り筋には、現在も上大久和町、中大桑町、下大桑町といった町名があり、これらは、道三により追放された土岐頼芸の居城大桑の地名からきたものである。頼芸追放後、道三は大桑城下の町人衆をこの筋沿いに集め、町屋を形成させたという。

また、七曲り筋には、当時の井口村の住民を集め住まわせたという。これら二本の筋に添って稲葉山城の城下町は形成されていったのである。そして、これらの道筋から南へやや離れたところに伊奈波神社と美江寺を置き、南への守りとした。

土塁に囲まれた惣構の中は内町、外は外町と呼ばれ、三方の入り口(南の御薗町、西の岩倉町、北の中川原)には市がたっていたようで、市神として榎(エノキ)が植えられていたといわれる。現在、若宮町の粕森神社前にある榎は、御薗の榎の後身とされるが、もともとは御薗の地にあったものを、後世に現在地へ移したものである。

城下町づくりに力を入れた道三であったが、その生涯の大半は戦いに明け暮れる毎日であった。一五五四(天文二十三)年、突然に家督を子の義龍に譲り鷺山城に隠退するが、これも必ずしも本人の意思ではなかったようである。そのため、二年後(弘治二年)には再起をかけて義龍と戦うことになる。いわゆる「長良川の合戦」である。道三の呼びかけにはせ参じた者はわずかに二千騎ほどで、敗れた道三は壮絶な最後を遂げたという。

道三の築いた城下町は、後に美濃入りする織田信長によって、さらに整備されたものになっていく。(濃飛の歴史を語る会・吉野光浩)

「大桑」の地名が今に残る百曲り筋の町並み

2007年(平成19年)6月5日　岐阜新聞掲載

西暦	和暦	年齢	ことがら
一四九二	明応初年		山城国出身の松波庄五郎、美濃で土岐氏に仕官、西村勘九郎（道三の父、のち新左衛門尉）を名乗る。
一四九四	明応三	〇	この頃美濃にて、長井（旧姓西村）新左衛門尉の子として誕生。
			のちに一〇代守護となった頼武（政頼）を追放し、自分を信任するその弟頼芸を守護職につけることを謀る。
一五〇九	永正六	一五	美濃国守護政房、館を革手（川手）から福光へ移す。
一五一九	永正一六	二五	守護政房死去、治郎頼武一〇代相続。
一五二七	大永七	三三	頼芸とともに、頼武（政頼）を攻め追放。頼武は越前朝倉氏を頼る。
一五二九	享禄二	三五	頼芸美濃国守護となる。
一五三二	天文元	三八	深芳野（頼芸の元愛妾）義龍産む。
一五三三	天文二	三九	頼芸、長良枝広（えだひろ）の新邸に移る。
一五三五	天文四	四一	土岐家執権長井長広夫妻を殺害、長井家を乗っ取り長井新九郎規秀と名乗る。
			道三と明智氏（小見の方）の間に帰蝶誕生、長良川大洪水、死者多数、斎藤左近太夫利政と名乗る。
			稲葉山城を改修して移住、伊奈波神社を井口洞に移す。
一五三六	天文五	四二	頼芸、美濃守任官、六角定頼・朝倉孝景美濃へ出兵（一〇代守護頼武が越前朝倉家に居た故）
一五四二	天文一一	四八	道三は守護頼芸を攻め、政治の実権を握る、頼芸尾張へ逃れる。
一五四四	天文一三	五〇	尾張の織田信秀美濃に攻め入るが敗退、利政美江寺城主和田氏を逐う。
一五四五	天文一四	五一	阿願寺へ左近太夫利政禁制出す。
一五四八	天文一七	五四	土岐頼香（頼芸弟）華厳寺へ禁制出す、道三と織田信秀との和睦成立、
			道三娘と結婚、美江寺を現在地に移す。

西暦	和暦	年齢	ことがら
一五四九	天文一八	五五	道三は、娘帰蝶（濃姫）を信長に嫁す、信長と富田の聖徳寺で会見。
一五五〇	天文一九	五六	左近太夫道三、常在寺へ禁制、西円寺、道三国盗り完成、織田信秀死去。
一五五二	天文二一	五八	道三井口道場へ判物を出す。
一五五四	天文二三	六〇	快川恵林寺へ入寺する。
一五五五	天文二四	六二	斎藤山城守道三、伊勢神宮用材流下に判物を出す。
	（弘治元）		一一月、義龍弟二人を殺し、道三と義絶　義龍は笵可（はんか）の名で美江寺へ禁制を出す。
一五五六	弘治二	六二	道三、義龍と長良川河原で合戦し、敗死する。
一五五八	弘治四		義龍、治部大輔（じぶだいふ）に任官。
一五五九	永禄二		義龍、幕府相伴衆（そうばんしゅう）となる。
一五六〇	永禄三		九月、義龍城下伝灯寺別伝と師檀の約をする。
一五六一	永禄四		二月快川ら別伝に反発し、瑞泉寺へ出る、五月義龍死去。

報道記事から見る
岐阜の偉人たち

明智光秀（あけちみつひで）

- 美濃国守護土岐氏の分流で、戦国の智将
- 斎藤義龍に追われ越前朝倉氏の許で再起図る
- 天下統一を目指す織田信長軍団の近畿管領（かんれい）的立場に
- 主君織田信長父子を討ったが、秀吉軍に敗退
- 近江の坂本、丹波の亀山（亀岡）及び福知山に築城
- 教養深く、和歌・連歌を好み、茶道を嗜（たしな）む
- ゆかりの地の多くで、祀られ供養され、愛される

出身地美濃と生育時代

明智氏は、美濃国守護土岐氏の系譜をひく頼重（よりしげ）の時、土岐郡妻木に拠って、明智姓を名乗ったのに始まる。妻木には、明智氏・妻木氏の菩提寺崇禅寺がある。のちに、可児郡明智荘に拠り、長山に築城し、一族の墓は、現在の天龍寺（てんりょうじ）境内にある。

光秀は、「明智氏一族相伝系図書」（東大史料編纂所蔵）では、一五二八（享禄元）年としているが、確証はない。しかし、細川忠興に嫁いだ珠をはじめとする子供の年齢などを勘案し、一応享禄元年としておこう。

どこで誕生したのかについては、可児郡瀬田の長山城下とするが、そのほかに諸説ある。

①恵那郡明智　母お牧の方の在所
②石津郡多良　神士信高の次男で明智家へ養子入り
③山県郡中洞　土岐頼基の子として誕生、後に明智家へ養子入り

光秀は、一五三八（天文七）年一一歳のとき、家督を継ぎ明智氏の総領職となる。一五五六（弘治二）年一八歳のとき、父斎藤道三と対戦して滅ぼした義龍（よしたつ）に攻められ、長山城は落城し、一族離散し、流浪の旅に出たようで、消息が不詳状態となる。

さて、なぜ、義龍に攻められたかは、明智氏が、道三攻めに参加しなかったからである。明智氏としては、道三正室小見の方の在所であり、道三攻めには参戦できなかった。しかも、道三と明智氏の関係から、光秀は、道三に鉄砲の必要性や、兵法や経世術を学んだりしたようであり、決して、道三を攻めるようなことはできなかった。

妻木城

明智長山城石碑